

大石平 4 段階変遷案再考

齋藤瑞穂

1. 齋藤（2004）論文の問題点

東北北部における中期弥生土器編年の私案を、2004 年に発表した。

青森県南津軽郡田舎館村で出土した土器に対して、山内清男が「縄紋式以後」の「縄紋の多い土器型式」として注意を喚起し（山内 1932、1933）、他方、伊東信雄が「弥生式」として田舎館式を提唱して以降（伊東 1950）、この分野は縄文時代終末の大洞 A' 式から田舎館式に到るプロセスの解明に心血を注いできた。五所、砂沢、宿野部、八幡堂、二枚橋、井沢、宇鉄Ⅱ等の諸式がこの過程で設定され、やがて須藤隆がこれらの内容を整理し、かつ、田舎館式を 3 つのグループに分類して、現行の編年大綱を組みあげる（第 1 表、須藤 1983）。

しかしながら、須藤が扱った資料の多くは遺構にともなったものでなく、層位的な条件を満たしていなかったため、一括性や連続性は不問に付されてきた。旧稿・齋藤（2004）論文は、遺構出土の資料によってこれを検証し、より確かな案を構築しようとしたわけである。

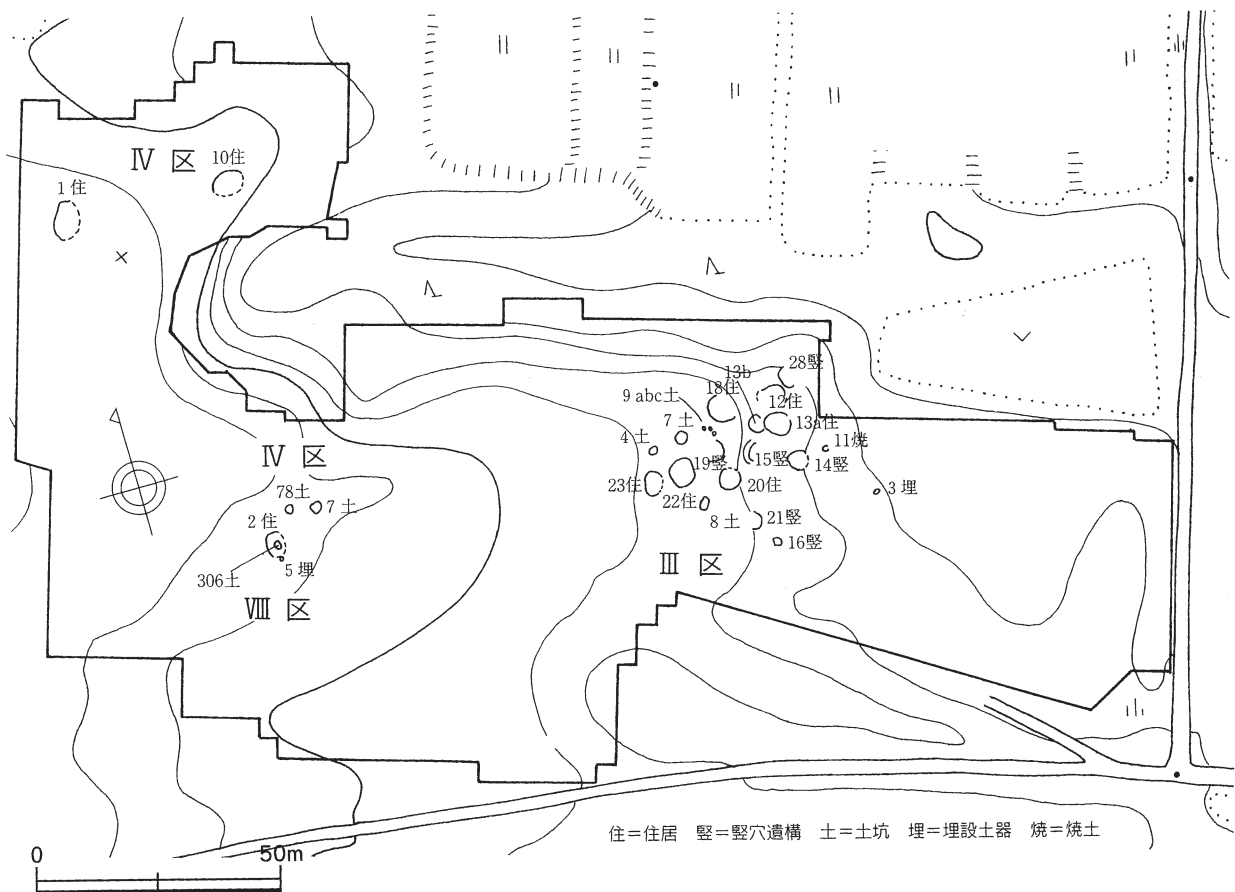
筆者が注目したのは、青森県上北郡六ヶ所村大石平遺跡である（第 1 図）。切り合う関係にある遺構をピックアップし、遺構出土品のそなえる特徴の違いに拠った中期弥生土器の編年をめざした。旧稿の記述には、「検出された遺構のうちⅧ区 2 号住居跡、Ⅷ区 306 号土壇、Ⅲ区 13 号 b 竪穴状遺構、Ⅲ区 13 号 a 住居跡をみると、切り合い関係から、①Ⅷ区 2 号住居跡は 306 号土壇に、②Ⅲ区 13 号 b 竪穴状遺構は 13 号 a 住居跡に先行することがわかる。そして、①の両遺構の出土土器が、②に比べて縄文時代晩期及び弥生時代前期の特徴を残している点から、①→②の順序を推定できる。そこで、Ⅷ区 2 号住居跡→Ⅷ区 306 号土壇→Ⅲ区 13 号 b 竪穴状遺構→Ⅲ区 13 号 a 住居跡という変遷過程をひとまず考えておくこととする」（齋藤 2004：3 頁）とある。

次いで、「最も完形資料が多い」「甕の特徴を比較して、上述の遺構編年の順で変遷を遂げているか、間に介在する段階がないかを点検」（3 頁）し、結果、「Ⅷ区 2 号住居跡からⅢ区 13 号 a 住居跡の段階に至る甕の器形や文様や成形技法が、間断のない変遷を辿ることが明らかになった。また、これらの遺構以外から出土した甕は、いずれかの段階に属する特徴をそなえており、4 段階の間に介在する段階は見出し得なかった。そこで、Ⅷ区 2 号住居跡段階→Ⅷ区 306 号土壇段階→Ⅲ区 13 号 b 竪穴状遺構段階→Ⅲ区 13 号 a 住居跡段階に至る一連の変遷過程を推定し、煩雑さを避けるために以後大石平Ⅰ段階～Ⅳ段階と称する」（6 頁）との帰結に達している。

そうして、最も古い大石平Ⅰ段階を中期初頭にあて、他方、同Ⅳ段階の次に六ヶ所村家ノ前遺跡の B 類土器を加えて（大湯ほか 1994）、中期の終末とする。この大石平の 4 段階+家ノ前 B 類段階¹⁾の甕の特徴を津軽方面にも敷衍し、宇鉄 12 号墓段階→宇鉄土器ブロック段階→垂柳Ⅲ段階→垂柳Ⅳ段階→家ノ前 B 類段階との序列を提案した（第 2 表）。

	東北地方 (西部)	東北地方北部		東北地方中部 (東部)
		西部	東部	
1	(+)	砂沢式	砂沢式	(福浦島下層式)
2	(脇本)	(五所式)	二枚橋式	山王Ⅲ層・谷起島式
3		井沢式	宇鉄Ⅱ式	(寺下囲式)
4a・4b	志藤沢・宇津台式	(田舎館)	(田舎館)	榊形囲式
5		+	(念仏間)	(崎山囲式・常盤式)
6	+	+	+	(天王山式)

第 1 表 須藤隆による東北北部の弥生土器編年（須藤 1983 を一部改変）



第1図 大石平遺跡の調査区と検出遺構（工藤 2005b を一部改変）

以上の議論に対して、発表後、いくつかの批判を頂戴した。その第一は、大石平Ⅰ段階（第2図1・5）の年代的位についてである。Ⅷ区2号住居跡の出土品を標式とするⅠ段階を、旧稿は「従来二枚橋式と認識されてきた長頸の甕である」。「頸部は直立ないしは軽く外傾し、口縁部が開く。頸胴境に明瞭な段があり、肩が強く張る。単節RLを口縁部に横回転し、胴部に斜回転する。頸部上半に1～3条の横走沈線を施し、下半に無文帯を設ける。胴部には文様をもたない。従来の二枚橋式では、胴部などに変形工字文や波状入組文を施す甕（以下、装飾甕）と、横走沈線のみの装飾性の低い甕（以下、非装飾甕）とが併存するが、本遺構では非装飾甕に限られている」（3頁）と説く。装飾ぶりに違いをみとめながらも、「肩部が強く張り、最大径はほとんどの場合ここにある」（須藤 1970:25 頁）という二枚橋式の長頸甕の形制との共通性を優先し、大石平Ⅰ段階を中期初頭に位置づけたようである。

これに対して、品川欣也は、「齋藤氏は二枚橋式に併行する土器群として大石平Ⅰ段階をあて、同時期の異なる土器群と理解した。その型式学的な主な根拠は、甕の器形である。ただし、齋藤氏も触れているように、大石平Ⅰ段階（Ⅷ区2号住居址出土土器）の胴部上半の文様帯に単位文様を欠く点は確かに二枚橋式と異なる。大石平Ⅰ段階とⅡ段階のまとまりとされたⅧ区2号住居址および306号土坑は、接合関係をもつ一つの遺物集中部の中に納まり、比較的時間帯の狭い中での前後関係といえる。この遺物集中部に甕の胴部上半の文様帯をもつ土器（10・11）の一群が散見されることが気にかかる。しかも、この一群は大石平Ⅰ段階をほとんど含まず同遺跡Ⅳ区第Ⅳ群土器（13～18）としてよくまとまり、二枚橋式に類似するも、甕の口縁内側と頸部（口外側下）に周回する沈線が多条化して細い（13）。また台付浅鉢や鉢の文様帯構成と文様描出手法は二枚橋式と変わらない

	北海道南西部	岩木川・米代川流域	小川原湖沿岸域・馬淵川下流域
前期	？	砂	沢
中期	茂別 H-3 / アヨロ 1	宇鉄 12 号 墓	大石平 I
	茂別 H-2 / アヨロ 2a	宇鉄土器ブロック	大石平 II
	茂別 H-4 / アヨロ 2b	垂柳 III	大石平 III
	アヨロ 3a	垂柳 IV	大石平 IV
	アヨロ 3b	家の前 B 類	
後期		広義の天王山式	
		？	？

第 2 表 齋藤（2004）の中期弥生土器編年

ものの、単位文様の変形工字文は変容し横位連繫志向が強く、縦スリットで区切る重弧線文が採用される（15・17）ことから後出と判断できる。そして、むしろ下北地方の二枚橋式に後出する青森県佐井村八幡堂遺跡出土土器〔工藤 1978〕の一部（19～24）と類似することに気付く。

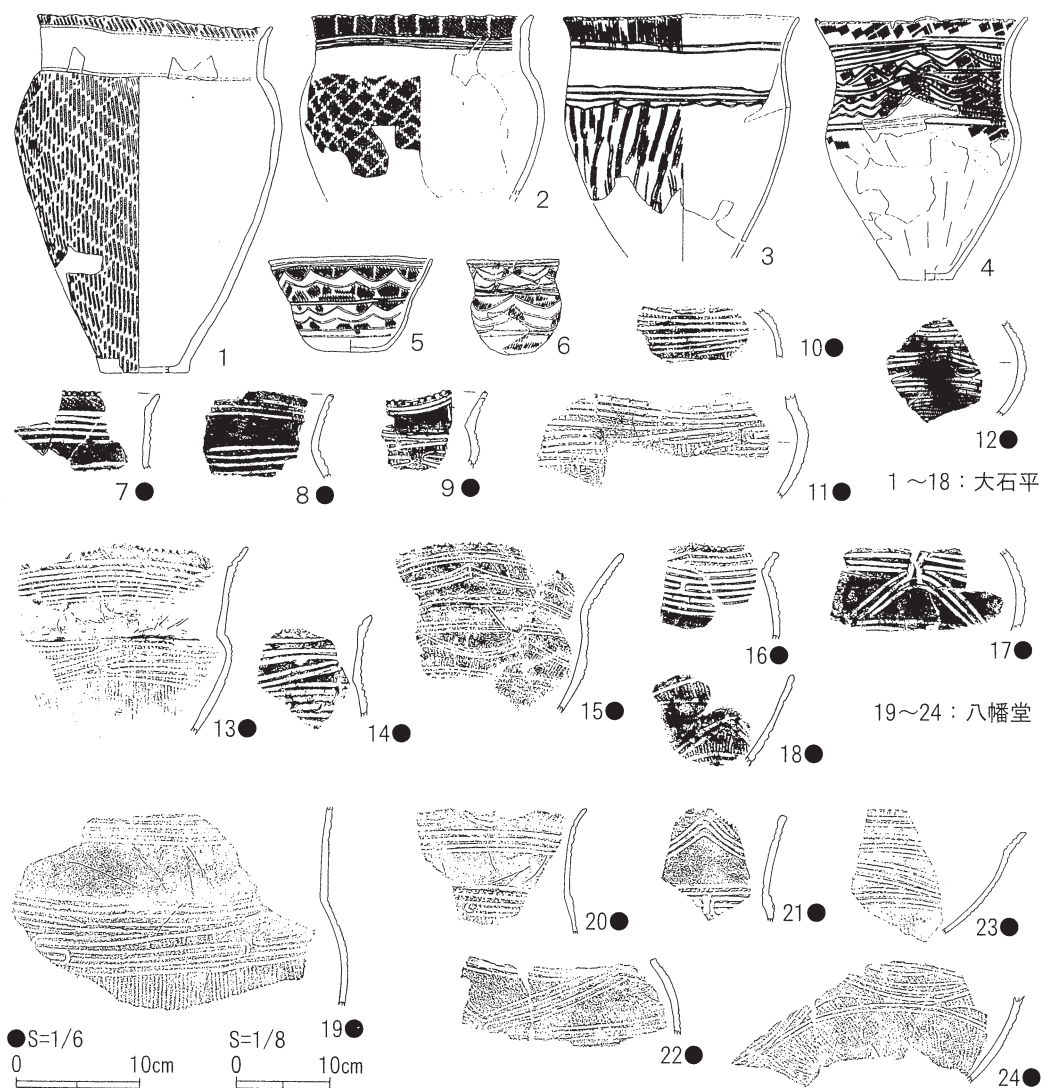
従って、大石平 I 段階は二枚橋式に対比できず、しかも後続する土器群にも対比できない。つまり、砂沢式併行期の後に二枚橋式、次に大石平 IV 区第 IV 群土器と八幡堂遺跡出土土器の一部、そして大石平 I 段階の順序で理解すべきであろう」（品川 2005:32 頁²⁾、引用文中の数字は第 2 図に対応）と述べた。大石平 I 段階は二枚橋式よりも新しく、同時期に位置づけるのは適切でない、という主張である。

批判の第二は、「Ⅷ区 2 号住居跡における長頸の甕は、次の 306 号土壇段階で肩の段が消失して頸胴境が曖昧になる。そしてⅢ区 13 号 b 堅穴状遺構段階で口径が拡大し、連続山形文が出現する。さらに、Ⅲ区 13 号 a 住居跡段階では、頸部が“く”の字状の屈曲となった広口甕と深鉢状甕とが併存し、頸部下半無文帯が消失して、頸部上半と胴部との文様帯が合体する」（6 頁）のように、齋藤（2004）論文が、甕の形制とその変転を最も重視した点に対してで、大坂拓は「齋藤氏の主張は、遺構の切り合い関係を基軸に、深鉢の「肩が張る」か否かなどを参照して考えられている。しかし、筆者は深鉢の器形変化は漸移的なものと考えている。また、言うまでもなく遺構の切り合いは必ずしもそれぞれに包含される土器の型式差に結びつくものではなく、一型式の時間幅の中でも起こりうる」³⁾（大坂 2007:78 頁）と論じる。土器型式の時間幅に対する認識や姿勢がそれぞれ異なるのは致し方ないにせよ、甕の形制の変化が漸次的であるという主張はもっともであり、従前より指摘されていた点でもあった（川西 1982）。

漸次的という語が出たついでに少しく付言すると、齋藤（2004）論文は「Ⅷ区 2 号住居跡からⅢ区 13 号 a 住居跡の段階に至る甕の器形や文様や成形技法が、間断のない変遷を辿ることが明らかとなった。また、これらの遺構以外から出土した甕は、いずれかの段階に属する特徴をそなえており、4 段階の間に介在する段階は見出し得なかった」（6 頁）と言い切ってしまう。しかしながら、切り合い関係は、構築時の新旧を示すものであっても、連続性を担保しているわけではもちろんない。いま、大石平遺跡の諸例を見返すと、各々の段階の間が連続的か、介在する段階は本当になかったか、点検する余地があるように思う。

第三は、大石平 IV 段階に後続する、とみなした家ノ前遺跡 B 類土器の評価に対してである。旧稿では、家ノ前 B 類の甕を特徴づける受口状口縁が「大石平 IV 段階の甕には認められ」ず、一方で「広義の天王山式に」「多く認められる」（7 頁）点から、「中期の最終段階」に位置づけた。鈴木正博は、この点を厳しく批判する（鈴木 2014）⁴⁾。

齋藤（2004）論文に寄せられた以上の指摘は、肯ける部分が少なくない。虚心坦懷にこれを受けとめ、旧稿の中核を担う大石平 4 段階変遷案を、まずは一旦取り下げよう。そのうえで、10 年を闊した現在の眼で見直し、弥生時代中期の土器型式の行方をいまいちど辿ってみようと思う。



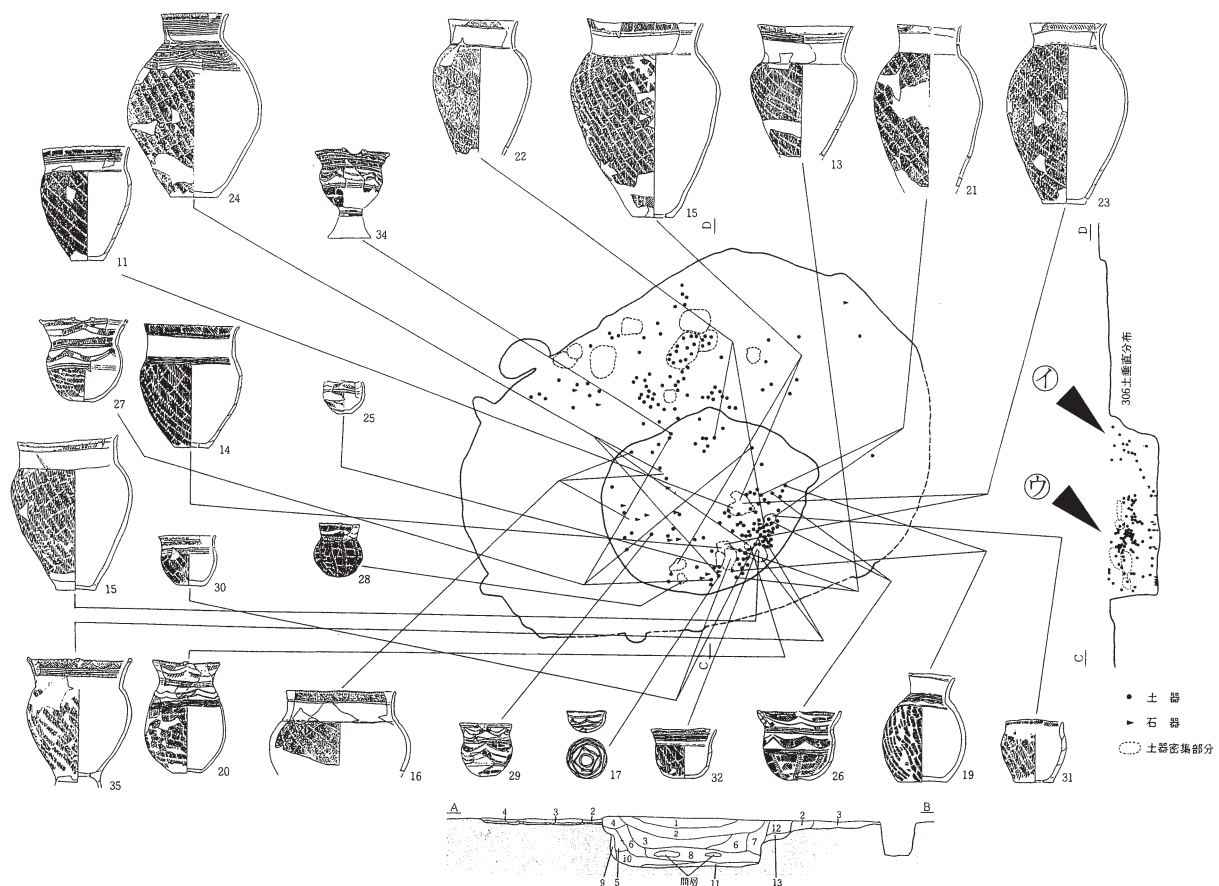
第2図 品川（2005）による大石平Ⅰ段階中期初頭説批判

2. 大石平遺跡出土土器の推移

下北半島の太平洋側は、海岸砂丘が発達し、その後背に小川原湖をはじめとするいくつかの湖沼が群在する。青森県上北郡六ヶ所村大石平遺跡は、その湖沼群のなかで最も北に形成された尾駁沼の北岸にあって、標高は低い場所で40m前後、高い位置で60mを測る。発掘は3年にわたって実施され、調査面積は90,000㎡に及んだ（北林ほか1985、山田ほか1986、新谷ほか1987）。

弥生時代の遺構はⅢ区、Ⅳ区、Ⅷ区で検出され（第1図）、Ⅷ区に①2号住居跡→306号土壇の切り合いがある。また、Ⅲ区にも②13号b 竪穴遺構→13号a 竪穴住居跡という切り合いがあり、旧稿ではこれらの4遺構の出土品を編年上の単位として扱った。ところが、前節でとりあげたように、①の両遺構は、切り合う関係であっても一部の土器が接合しており、「比較的時間幅の狭い中での前後関係」と品川欣也はみる。2号住居跡と306号土壇の各々を単位として扱うことは適切だったのか、本稿はこの点を検証するところから議論をスタートしよう。

さて、2つの遺構 X・Y が新旧の関係（X→Y）にあり、その双方から出土した資料が複数接合す



第3図 VIII区 306号土壌の出土状況（2号住居跡を306号土壌が切る、新谷ほか1987を一部改変）

る場合、YはXが埋まりきる前に構築された、と考えるのがスムーズである。したがって、出土した土器は、上述の①の切り合い関係でいうと、

㊦ 306号土壌が構築される前に投棄されていた、または流れ込んでいた

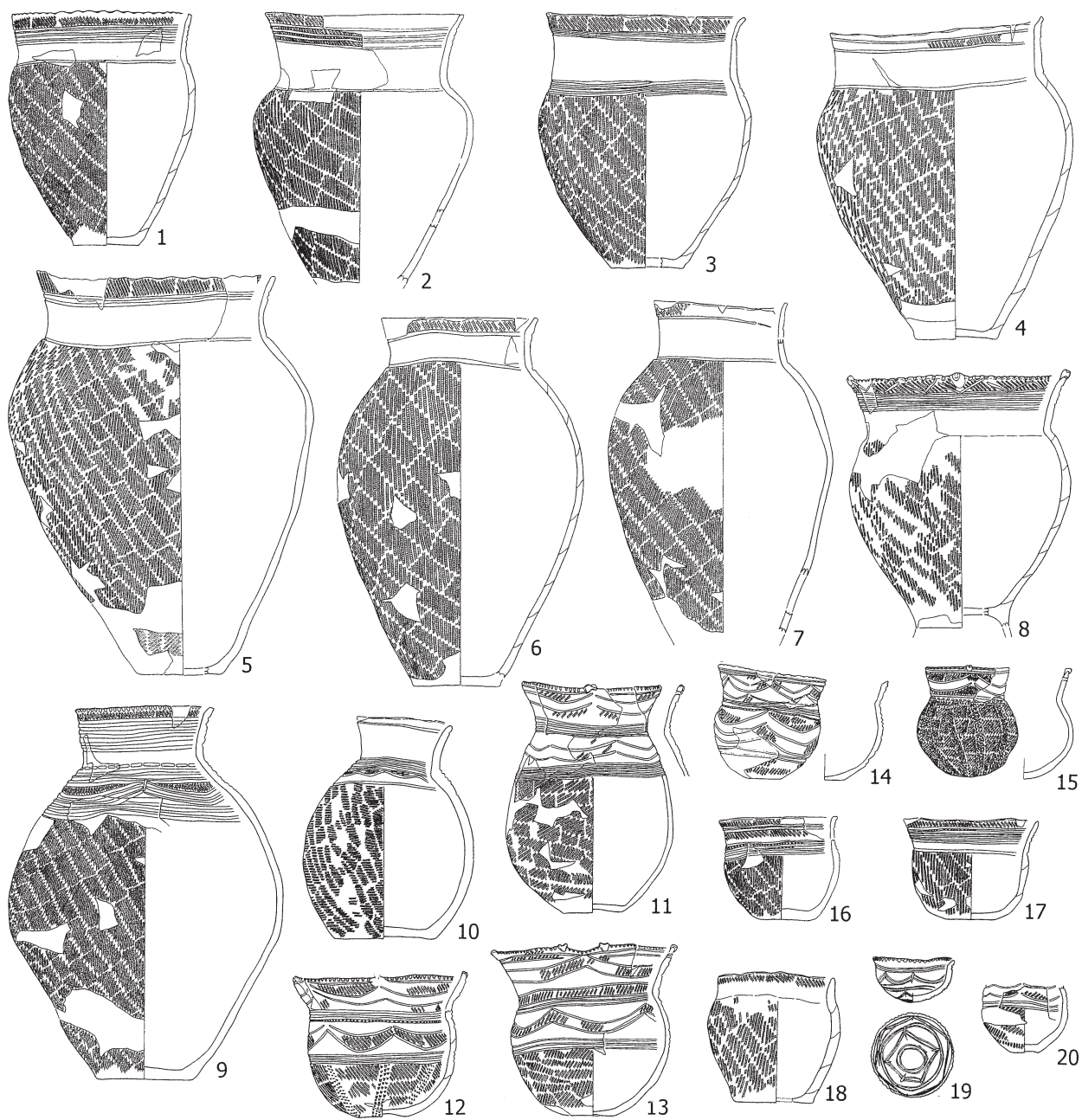
④ 306号土壌構築後、2号住居跡が埋没するまでに投棄された、または流れ込んだ

㊧ 2号住居跡の埋まった後、306号土壌が埋没するまでに投棄された、または流れ込んだ
のいずれかに属するわけである。

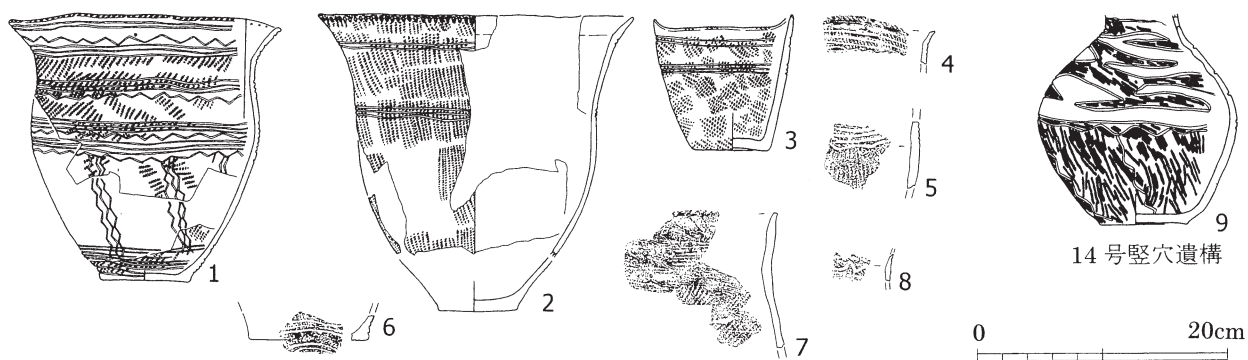
ところが、これらを識別するのは簡単でない。2号住居跡のプラン内で出土した土器のうち、306号土壌の出土品と接合する例は、躊躇うことなく④と判断しうるが、一方で接合関係にないからといって、必ずしも㊦であるとは限らないからである。それに較べて、④と㊧の分離は難しくない。「住居跡床面出土のものと、土壌のフク土の下位で出土した土器片が接合する」（新谷ほか1987:378頁）との報告どおり、④に属する土器が306号土壌に流れ込んだ様子は、エレベーション図からも追認できる（第3図④）。そうして、上層のまとまりは、306号土壌埋没時に投棄された上記㊧の一群とみなしてよい（第3図㊧）。

したがって、一括性が担保されているのは、306号土壌上層の出土品に限られる。これを、ひとまずの定点としよう。

VIII区 306号土壌上層（第4図）甕、台付甕、壺、鉢、浅鉢があり、磨消⁵⁾の弧文や鋸歯文が目立つ。8は台付甕である。口縁部は縄文を地文として、鋸歯文を施す。口縁部に文様を加えるのは、中期初頭の二枚橋式（須藤1970）や同式に続く宇鉄Ⅱ式（岩本ほか1979）、あるいは北海道島における恵山式の古い部分にみうけられるが（中村1973、高瀬2005、大坂2007）、多くは波状の口縁に沿わせ



第4図 Ⅷ区 306号土壌上層の土器



第5図 Ⅲ区 16号竪穴遺構の土器と関連資料

た弓なりの弧線文であり、平坦口縁で鋸歯文を施してあるのはめずらしい。

鋸歯文は10の壺にもみとめられる。肩部に文様帯を設け、上端を4条の、下端を1条の直線文でそれぞれ画する。鋸歯文の上側は、縄文で填める。青森県上北郡おいらせ町立蛇(2)遺跡の例はこれに近く(鈴木1980)、やはり鋸歯文の上側のみに縄文を充たしてある。この種の磨消縄文技法は、むつ市脇野沢瀬野遺跡や(伊東ほか1982)、宇鉄Ⅱ式の標式である東津軽郡外ヶ浜町宇鉄Ⅱ遺跡の精製土器にも散見される(岩本ほか前掲、福田ほか1989)。

9の壺は、多条の直線文で文様帯の境を示し、いわゆる「結節沈線」をさらに加える。これは、浅い沈線をまずは施し、次いで深めに掻き、その際に生じる粘土を寄せて節を作出するもので、二枚橋式では肩部文様帯の上限を画する手立てとして盛んに用いられる(須藤前掲)。肩部は、3条の沈線で重弧文を描き、頂部を短い縦線で切る。「結節沈線」が二枚橋式と共通するものの、重弧文は同式にない。

丸底鉢は、磨消縄文技法を駆使して連弧文を描き出す(12～15)。15は口縁部を飾り、12～14は口縁部と胴部とに重ねる。内側に縄文を填めて帯状の弧文を作る場合と、外側を充たして弧文を浮きあがらせる場合とがある。口縁部と胴部の境は、直線文や帯縄文や刺突列で示す。押し引きして深い列点を作成するのは(12・14)、「結節沈線」が簡略化したものであろう。口唇部には刺突を加え、突起を設ける例も多い。なかでも注目されるのは、胴下半部を文様帯とする12・15で、3列を単位とする縦走刺突文で飾る。このようにして縦に刺突文を施す例は、他にない。

Ⅲ区16号堅穴遺構(第5図) Ⅷ区306号土壌上層で盛行した装飾を、かすかに継承しているのがⅢ区16号堅穴遺構の例である。1の甕がそれで、直線文と鋸歯文とで器面を飾る。何が一連の文様か、どれが区画文かを見定めることは容易でないが、見たままを表現すると、上下を直線文で区画した鋸歯文で口縁部を飾り、括れ部と胴部最大径部分に直線文+鋸歯文の組み合わせを配する。胴部最大径部分にはこれを2段重ねて、鋸歯文帯のようにみせている。胴下半部は、3条を単位とする縦走鋸歯文で飾る。306号土壌上層と繋がる細い糸が、この文様である。

なお、縦走鋸歯文は、Ⅲ区14号堅穴遺構の壺にもみうけられる(9)。鋸歯文を1条とするのが16号堅穴遺構の1との違いであるが、それが製作時期の新旧に因るかはわからない。

Ⅲ区13号b堅穴遺構(第6図) 16号堅穴遺構に続く特徴を有するのが、旧稿で大石平Ⅲ段階と称したⅢ区13号b堅穴遺構の例である。第6図1は口縁部を縄文帯とし、その下方に直線文で分割した無文帯、鋸歯文帯、縦位短沈線帯を順に置く。短沈線帯は胴部との境に位置しており、「結節沈線」が転じた態様と考えて差し支えない。胴部は縄文帯とし、緩やかに描いた波状工字文を肩部に加える。2は部位の境が明瞭な形制で、頸部が開き気味に立ち上がり、口縁部で外反する。頸部の中央には分割する直線文がない。1で鋸歯文帯を配していた場所は、代わりに縄文帯がある。直線文+鋸歯文の組み合わせで区画がなされる。

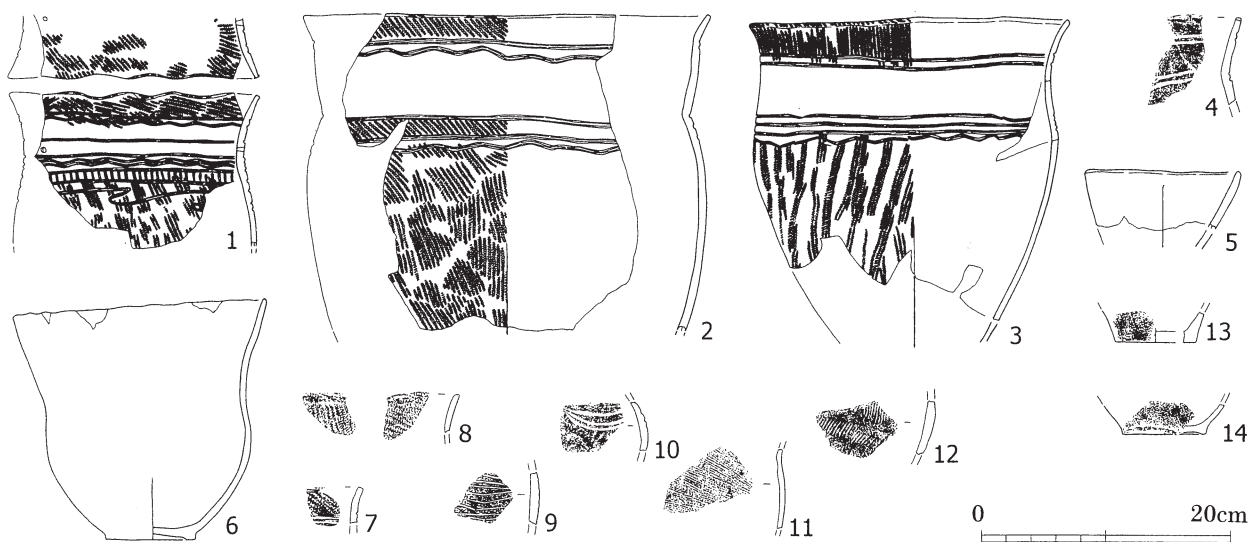
このように、2が部位と装飾との関係を鮮やかにしてくれたことで、16号・13号b両堅穴遺構出土甕の文様帯構造が臆気ながらみえ、

⑦装飾帯は4つで構成され、口縁部、頸部、肩部、胴部に配置される

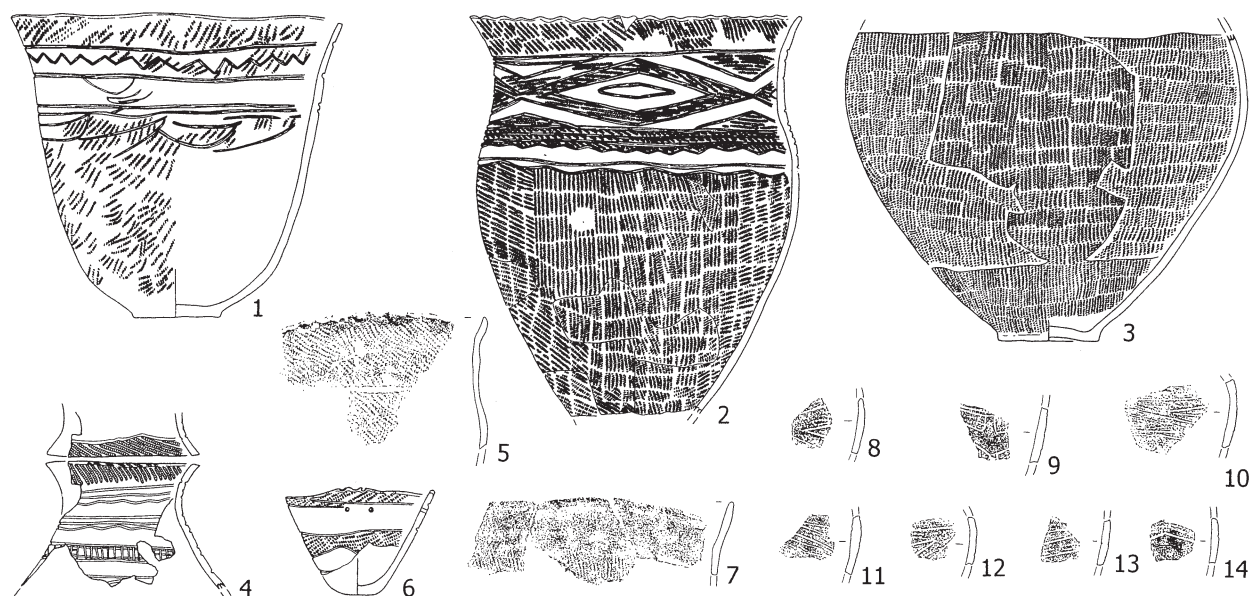
④頸部を分割する例と、分割せずに幅を広くとる例との両種が共存する

という2つを察知することができる。13号b堅穴遺構になって口縁部と胴部が縄文帯化し、頸部から肩部付近に文様が集約するようである。なお、④で摘出した2種を、以下ではそれぞれ分割タイプ、非分割タイプと呼ぶ。

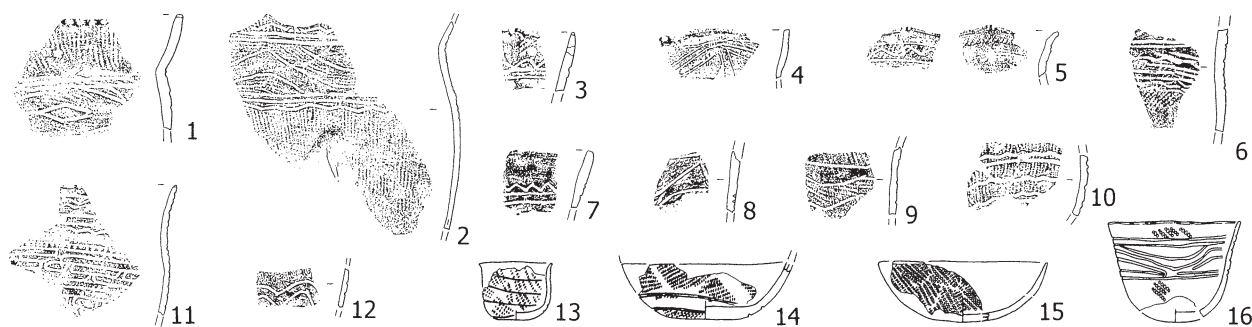
Ⅲ区12号堅穴住居跡(第7図) 文様帯と文様の特徴からみて、次に位置づけられるのは、12号堅穴住居跡の土器で、1は分割タイプの例である。13号b堅穴遺構の第6図1・2のように、直線文+鋸歯文で文様帯を区画する、というのが本来の約束事であったが、鋸歯文が独立し、頸部の上半



第6図 Ⅲ区13号b 竪穴遺構の土器



第7図 Ⅲ区12号竪穴住居跡の土器



第8図 Ⅲ区13号a 竪穴住居跡の土器①

分に広がってしまったようである。およそ1条の直線文によって区画を行うが、頸部の下端のみ2条にするのは肩部を意識しているからに違いない。胴上半部には松葉状の文様を加える。第6図1との比較を通じて、波状工字文が転じたらしいことが窺える。

他方、2の例は非分割タイプで、頸部を磨消の菱形文で飾る。実測図は正しく表現できていないが、口縁部は内湾して、受口状を呈する。306号土壙上層の段階では、磨消文様が精製器種に使われていたが、本住居跡は甕にも用いるらしい。小破片ではあるが、8～14は磨消の菱形文で飾った同一個体の壺であり、甕と壺とで文様がシェアされていることを物語る。北海道島の恵山式においても、新しい部分の甕は、頸部を精製器種の磨消文様で飾るという（大坂前掲）。

4も壺で、分割タイプの構成に似る。肩部の縦位短沈線帯は、13号b 堅穴遺構の段階から継承されたものであろう。

Ⅲ区 13号a 堅穴住居跡（第8・9図） 精製器種と甕との文様共有という新しい展開をむかえた12号堅穴住居跡の後を、13号a 堅穴住居跡が襲う。旧稿で大石平Ⅳ段階と呼んだ一群である。分割タイプの第9図1は口縁部が広がり、口頸部境は区画の直線文の上に列点を付す。区画文は、上から直線文4条+鋸歯文、直線文2条+鋸歯文、直線文2条、直線文2条+鋸歯文であり、肩部の上端にあたる部分のみ鋸歯文を欠く。

第8図1・2は非分割タイプである。「受口状口縁は大石平Ⅳ段階の甕には認められない」（齋藤2004:7頁）という旧稿の記述は誤りであり、両例とも口縁部は受口状を呈する。1は磨消菱形文、2は上向き（U）・下向き（∩）の両連弧文を左右にずらして、磨消の波状文を描き出す。これらの非分割タイプ甕には、㊦肩部文様帯の消失と、㊧鋸歯文の発達という新たな傾向がみとめられる。すなわち、直線文+鋸歯文を組み合わせる場合、ここまでみてきた例はおしなべて直線文を上位に、鋸歯文を下位に配していた。ところが本遺構には、第8図2、3、7のように、位置を逆転させ、鋸歯文を上位に置く例が現れる。鋸歯文の発達は、口縁部鋸歯文帯の復活を促すらしい（第8図5、第9図2・6）。

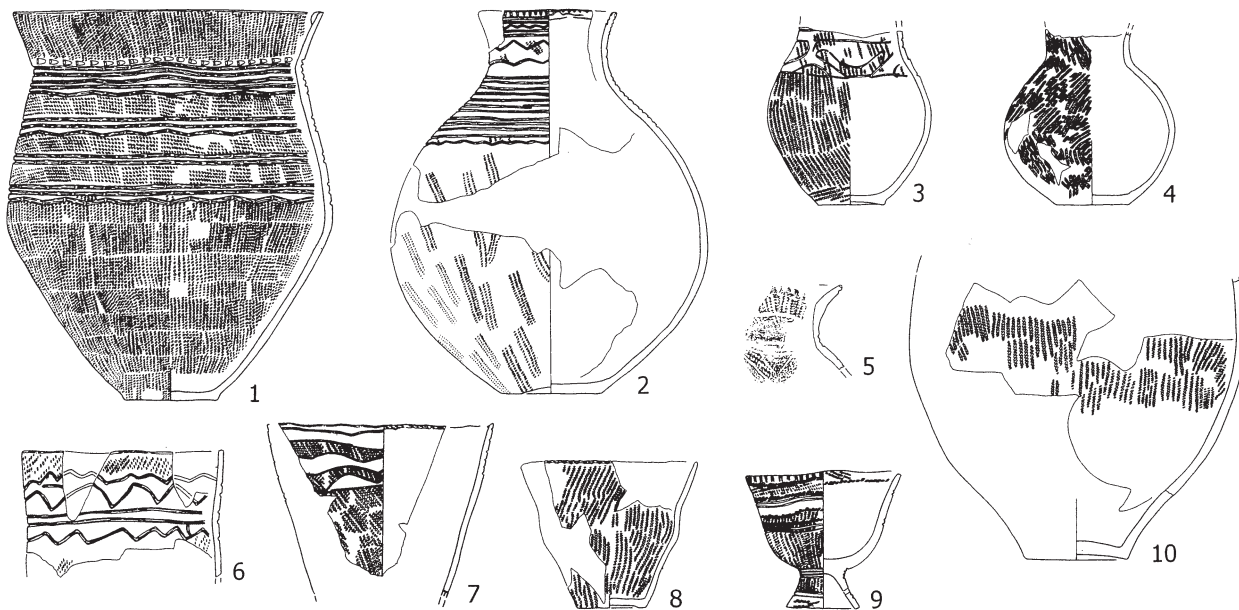
第9図9は高杯で、内外に縄文原体の圧痕文を施す。

Ⅲ区 22号堅穴住居跡（第10図） より新しい特徴をそなえているのは、22号堅穴住居跡の土器である。器形を復原し得た例は、ことごとく口径が最大径となる。1は突起を付し、口頸部境の区画文は鋸歯文を上位に配する。2は、稲妻状の磨消入組文で飾り、肩部文様帯をもたない。筆者の関心を特に喚起するのは、磨消文様の中央にある緩やかな鋸歯文で、本来なら分割タイプに施されるべき区画線であろう。本遺構にみあたらないことから推測すると、頸部分割の作法は衰退してしまったのかもしれない⁶⁾。また、口縁部のみに文様帯をもつ例が現れる（3）。大ぶりの山形文で、上側に横線を加える。

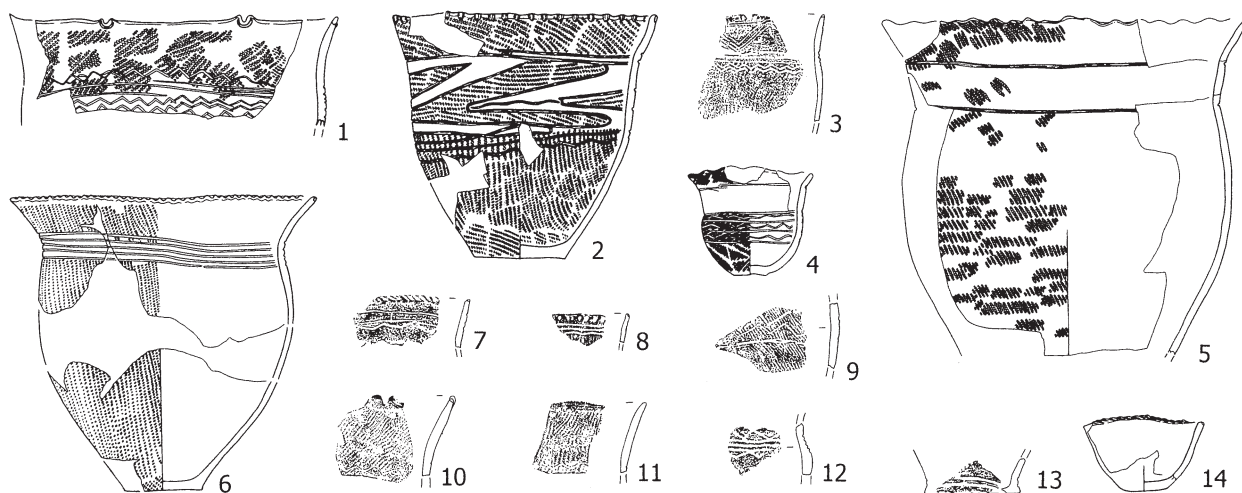
Ⅲ区 20号堅穴住居跡（第11図） 20号堅穴住居跡の例が最も新しい。1は甕で、口唇を挟んで内外に縦長の刺突列をめぐらす。縦長の刺突列は、3の甕や11の鉢にもみとめられ、本住居跡の土器群を特徴づける。複雑化した磨消の入組文で頸部を飾り、口縁部内面に縄文原体圧痕文を施す。ちなみに、口縁部を縦長の刺突列で、胴部を22号堅穴住居跡にみられる山形文（第10図3）で飾った例が、青森県八戸市南郷区砂子遺跡から出土している（木村2000）。

3. 大石平遺跡出土土器の上下限

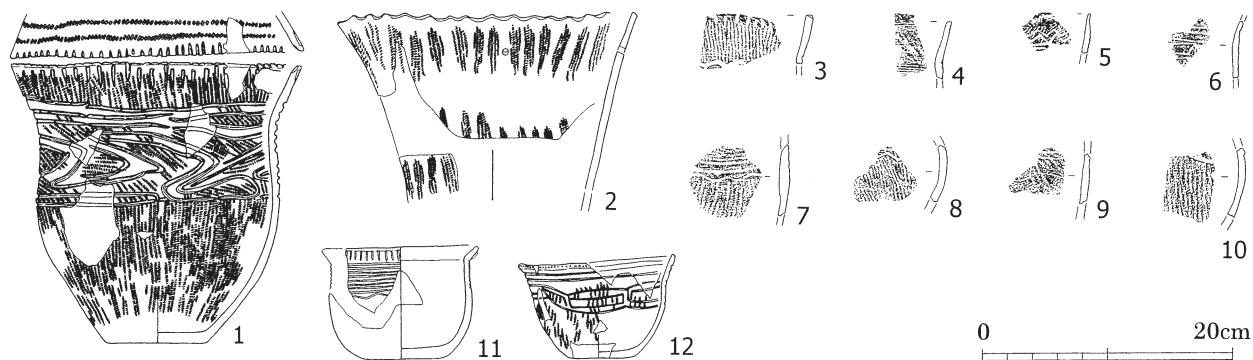
大石平遺跡の上限 Ⅷ区306号土壙上層の土器群を出発点としたとき、以後、Ⅲ区16号堅穴遺構、Ⅲ区13号b 堅穴遺構、Ⅲ区12号堅穴住居跡、Ⅲ区13号a 堅穴住居跡、Ⅲ区22号堅穴住居跡を経て、Ⅲ区20号堅穴住居跡例に到る7つの段階を摘出することができる。



第9図 Ⅲ区13号a 竪穴住居跡の土器②



第10図 Ⅲ区22号 竪穴住居跡の土器



第11図 Ⅲ区20号 竪穴住居跡の土器

しかしながら、306号土壙上層の資料はあくまで作業上の定点であり、大石平遺跡で最も古いわけではない。前節で点検したように、306号土壙は2号住居跡と切り合う関係にあり、①2号住居跡と306号土壙下層の土器群は、②同土壙上層のそれに先行する（第3図）。

一方、①の諸例が②に先んじることが、埋没プロセスのうえで確実であっても、その双方がともに編年上の単位としてふさわしいかは、また別の問題である。2号住居跡の平底鉢は（第12図1）、①に属する数少ない精製土器の1つで、磨消の連弧文を重ねる。外側を縄文で充たして弧文を浮かあがらせる手法や（2）、直線文による文様帯の区画は306号土壙上層にもみられ（3）、器の形制のみ相違する。この場合、例えば、1の胴部が発達し、丸底化して306号土壙上層の鉢が生成されたというならば、当然、単位として指標化しなければなるまいが、しかしそうは言いきれない。時期差はそれほどなく、系譜関係にない器種の間で文様を共有している状態とみておくのが、いまは穏当なところであろう。

むしろ、306号土壙上層の出土品と違いをみせるのは、Ⅷ区の遺構外から出土した土器群である（第13図）。報告を担当した一条秀雄は、

- ⑦列点文は遺構外出土品にないが、2号住居跡・306号土壙にある
- ⑧波状工字文は遺構外出土品にあるが、2号住居跡・306号土壙にない
- ⑨磨消の連弧文は、遺構外から少量しか出土していない
- ⑩波状口縁鉢は遺構外出土品にあるが、2号住居跡・306号土壙出土品にない
- ⑪広口壺は、遺構外からはほとんど出土しない

という点から、2号住居跡や306号土壙といった遺構内の出土品とは分けてとらえ、「文様から見ると二枚橋式、宇鉄Ⅱ式の文様に類似する。（波状工字文、結節沈線）しかし、二枚橋式に多く見られる変形工字文はまったくなく、やや新しいと考えられる。器形では、二枚橋式、宇鉄Ⅱ式に類似するものが多いが、（本稿の第13図15）第141図4のように頸部から口縁部が外側へ開くように立ち上がる形状は、二枚橋式のものとはやや異質で、やはり二枚橋式よりも新しい要素と考えられる」と述べ、「二枚橋式よりは新しい時期のもの」（新谷ほか 1987：381頁）と結論づけた。品川欣也も、Ⅷ区の遺構外出土品のなかには胴上半部に文様帯をもつ甕があって、北隣のⅣ区でこれらは良好なまとまりをみせ、ここでは2号住居跡・306号土壙のような例もほとんど含まれない、と指摘する（品川 2005）。

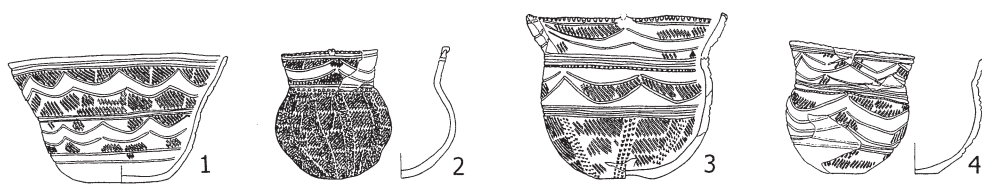
旧稿で報告者の考察を黙殺したことを反省し、あらためて遺構外の例を見直すと、306号土壙上層と同じく丸底鉢が存する一方で（第13図8～10）、同土壙にない例を含むことに気付く。それが1～3の台付鉢もしくは高杯であり、4・6の甕であって、7は縄文を全面に施す。

第14図は、品川が注目したⅣ区の出土品で、1～10は10号竪穴住居跡の、11～21は7号土壙の、22～26は78号土壙の例である。下段に掲げた78号土壙の甕は（24）、306号土壙上層の甕と同じく、肩部文様帯を欠く。連弧文を描く台付鉢も（22）、脚部文様の共通する例が2号住居跡にあり、306号土壙上層の諸例と期をほぼ同じくしていることを物語る。

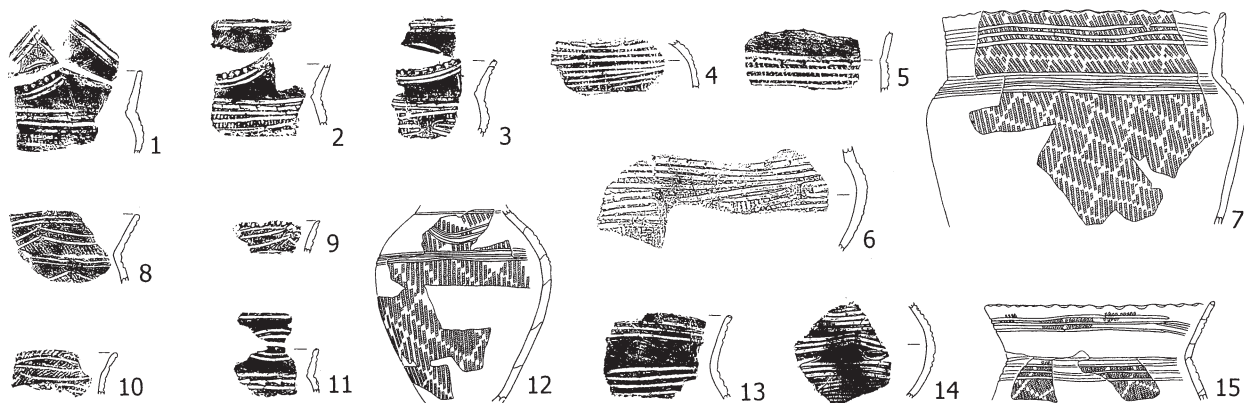
中段の11は、7号土壙の丸底鉢である。突起を付し、306号土壙上層の例と違いがないようにみえるが、内面に文様をもつ。12や14・15は頸部が狭く、頸胴部境に強い屈曲をもつ甕で、口縁部に弓なりの弧線が沿う。これは、306号土壙にみあたらない。したがって、同土壙と共通するばかりの78号土壙よりは、古い位置をあたえうる。

上段の5は、10号竪穴住居跡の甕で、波状工字文を描く。厚みがない点などを勘案すると、台をもつ小型の例であろう。肩の部分にあたり、小破片ながら、肩部文様帯を甕がそなえることを察知しうる。1の高杯も波状工字文で飾り、「結節沈線」で上下を画する。地文と重ねないのはめずらしい。口縁部に文様をもつ3は、7号土壙の12などに類する甕であろう。

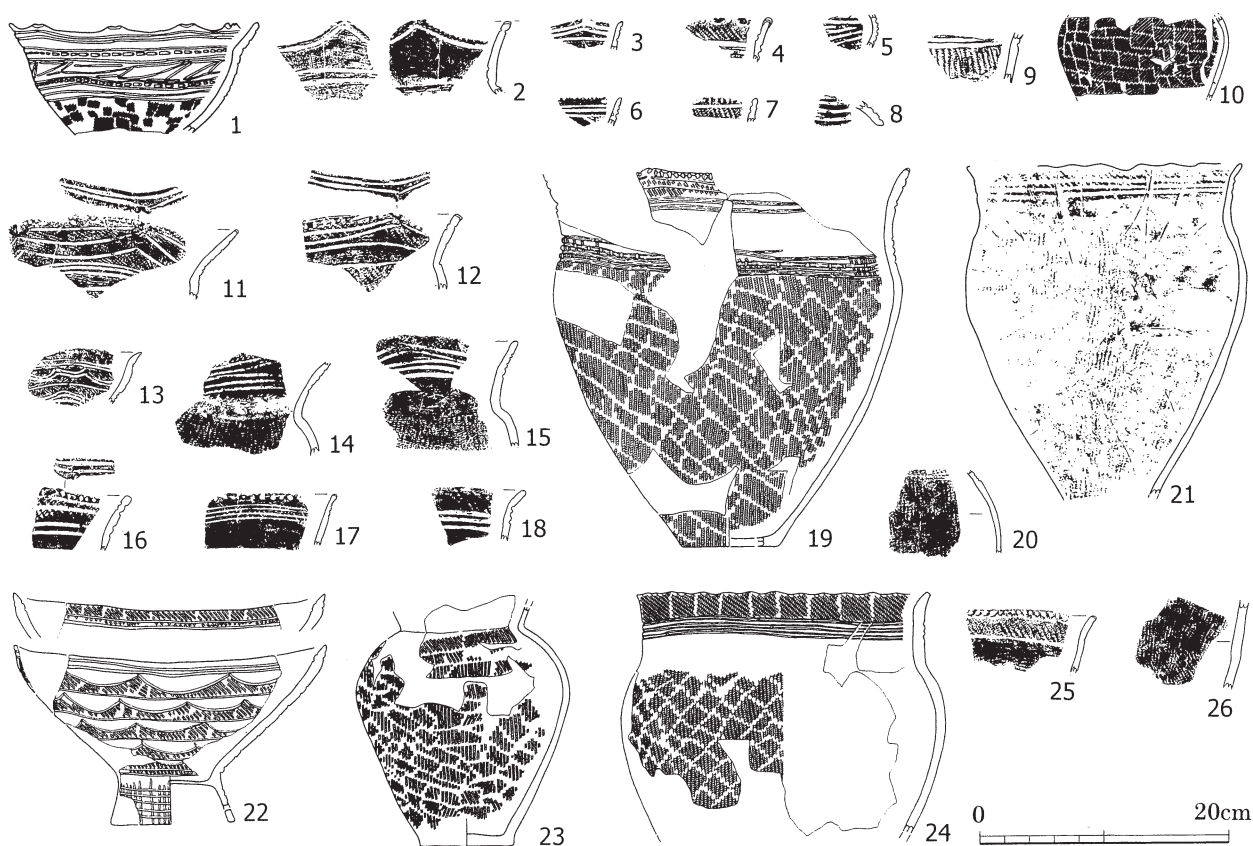
約言すると、波状工字文で飾る甕や高杯は10号竪穴住居跡のみにあり、口縁部文様帯をもつ甕が



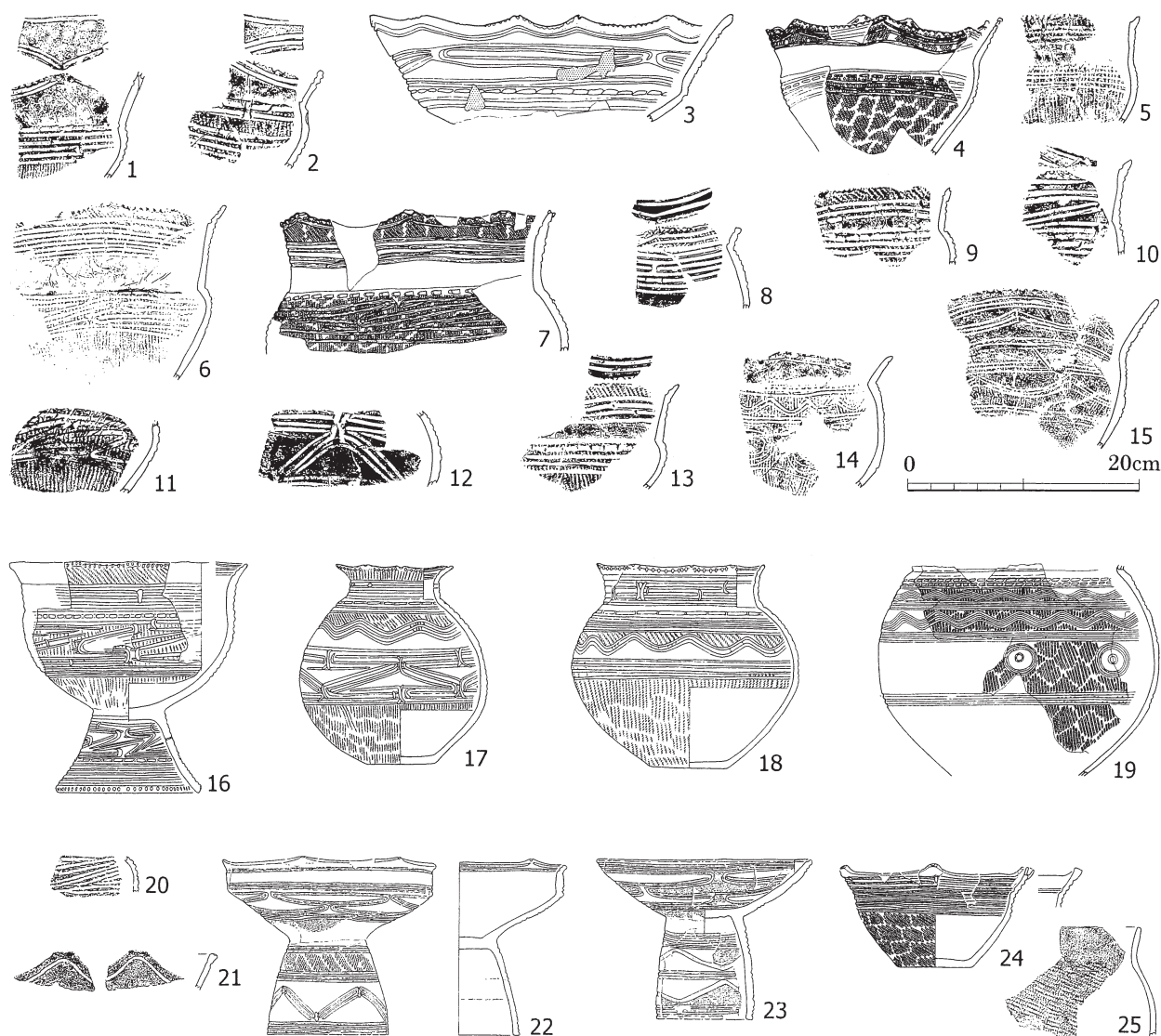
第12図 Ⅷ区2号住居跡と306号土壌の時間差 (1:2号住居跡、2~4:306号土壌)



第13図 Ⅷ区遺構外出土の土器



第14図 Ⅳ区の土器 (1~10:10号竪穴住居跡、11~21:7号土壌、22~26:78号土壌)



第15図 IV区遺構外出土の土器と関連資料(1～15: IV区遺構外出土品、16～19: 宇鉄Ⅱ遺跡、20～25: 田向冷水遺跡)

10号竪穴住居跡と7号土壇とにみうけられる。他方、磨消連弧文で飾った丸底鉢は、7号・78号両土壇にあって、10号竪穴住居跡にない。したがって、以上の3つの遺構は、①10号竪穴住居跡→②7号土壇→③78号土壇という順序で整理され、78号土壇はⅧ区306号土壇上層に対比しうる。この過程で、波状工字文は連弧文に交替するらしい。

ちなみに、第15図1～15に掲げたのはIV区の遺構外出土品で、10号竪穴住居跡や7号・78号の両土壇になかった変形工字文の土器が眼につく(3・10・12)。これが、㊦変形工字文は10号竪穴住居跡段階にはすでに廃れ、遺構外がより古い資料を含むことを示すのか、あるいは㊦遺存状態が悪く、偶然遺構内で残らなかったことに因るのか、現時点ではわからない。しかし、㊦・㊦のいずれの場合であっても、変形工字文がⅧ区306号土壇上層の段階までに連弧文に替わっているであろうことは、推断して差し支えないと思う。

14の鉢も特徴的で、波状文と同心円文とを重ねる。異なる文様の併施は継承されていかないらしく、306号土壇上層以降の諸段階にはみあたらない。周辺で捜してみると、二枚橋式の標式遺跡である青森県むつ市大畑町二枚橋遺跡では確認できないが、同式の新しい段階にあたるという同市瀬野遺跡には(高瀬 1998、根岸 2003 など)、波状文と工字状文とをあわせもった壺が存する⁷⁾。宇鉄Ⅱ式では、

外ヶ浜町宇鉄Ⅱ遺跡第4次調査土器ブロックに、磨消波状文と変形工字文とを飾った壺があり（17、福田ほか 1989）、第2号甕棺墓の棺身の壺は波状文と同心円文とを併施する（19、岩本ほか 1979）。波状工字文で飾る高杯（16）や甕がみられる点も勘案すれば、Ⅳ区10号竪穴住居跡の段階か、もしくはそれ以前であってもそうは離れていない時期に、宇鉄Ⅱ式が併行する可能性が高い。

次に馬淵・新井田川流域に眼を転じ、青森県八戸市田向冷水遺跡を標式とする田向冷水式と比較しておこう（小保内ほか 2006、須藤 2007、2008）。同式については、またの機会に述べようと思うが、4段階の細別が可能であり、SI30 竪穴住居跡が新しい（第15図20～25）。大石平遺跡との関係で注目されるのは甕の肩部片であり（20）、この点だけみれば、10号竪穴住居跡の段階は同式と接点をもつ可能性を残す。しかし、高杯を飾る変形工字文は本来の描出作法を比較的保っており（22・23）、3や12との相違ははなはだしい。

畢竟、多少の前後があるにせよ、大石平遺跡の初現は津軽方面でいうと宇鉄Ⅱ式の頃にあたり、馬淵・新井田川流域でいえば田向冷水式より新しい。

ポスト大石平 旧稿の大石平4段階変遷案では、大石平遺跡Ⅲ区13号a竪穴住居跡例を以て大石平Ⅳ段階を設け、同段階に続くものとして青森県上北郡六ヶ所村家ノ前遺跡の出土品に注目した（北林ほか 1993、大湯ほか 1994）。遺構にともなわない資料ではあったが、「家^{（マ）}の前遺跡は、大石平Ⅲ段階から、後期に属する広義の天王山式までが出土しており、小川原湖沿岸域における中期後半の様相を把握しうる好例である。A類、B類、広義の天王山式とに分類されている土器のうち、A類は本稿での大石平Ⅲ段階の一部と大石平Ⅳ段階にあたり、B類は大石平遺跡では認められない一群である」（同：7頁）と評し、

- ㊦家ノ前B類甕は口縁部が受口状を呈するが、これは大石平Ⅳ段階にみとめられない
- ㊧家ノ前B類甕は胴部が張らず、砲弾状であるが、大石平Ⅳ段階では胴部が膨らむ例が多い
- ㊨大石平Ⅳ段階で頻用される鋸歯文は家ノ前B類にほとんどみられず、上向き（「U」字状）、下向き（「∩」字状）の大ぶりの弧文を採用する
- ㊩家ノ前B類甕の磨消縄文は、大石平Ⅳ段階と違って、縄文の充填が不完全であったり、はみ出し部分を消さないなど、丁寧さに欠ける
- ㊪両遺跡間の距離は1kmほどであり、土器の違いを地域差に置き換えることはできない
- ㊫受口状口縁は、後期の天王山式に多くみとめられる特徴である

点を根拠として、「家^{（マ）}の前B類段階は大石平Ⅳ段階と広義の天王山式との間に位置づけられる。中期の最終段階とみておこう」（同：8頁）と結論づけた。

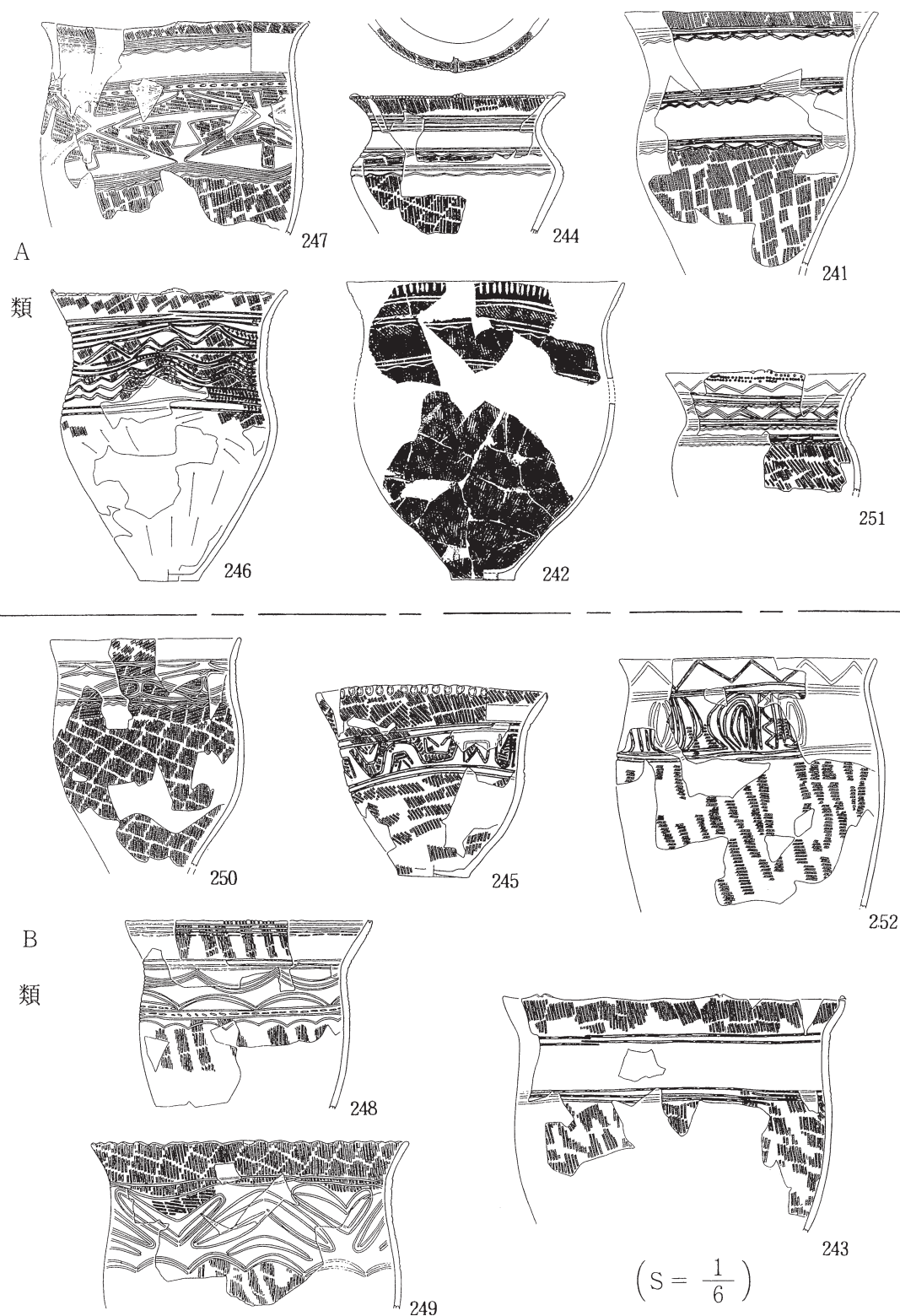
しかしながら、4段階変遷案の抜本的見直しを進めてきた本稿では、大石平Ⅳ段階の標式であったⅢ区13号a竪穴住居跡の次に、Ⅲ区22号竪穴住居跡、同20号竪穴住居跡という2つの段階が確認されている。さらには前節でも述べたように㊦の主張は誤りであり（第8図1など）、新古の弁別基準とならない以上、両遺跡の関係を別の角度から問い直さなければなるまい。

第16図に掲げたのは、神康夫による家ノ前遺跡第Ⅷ群土器の分類案で、

A類：「頸部が比較的すばまり、屈曲部の上部がゆるやかに外反していく器形」であり、「口縁部・頸部・胴部の3文様帯が存在」

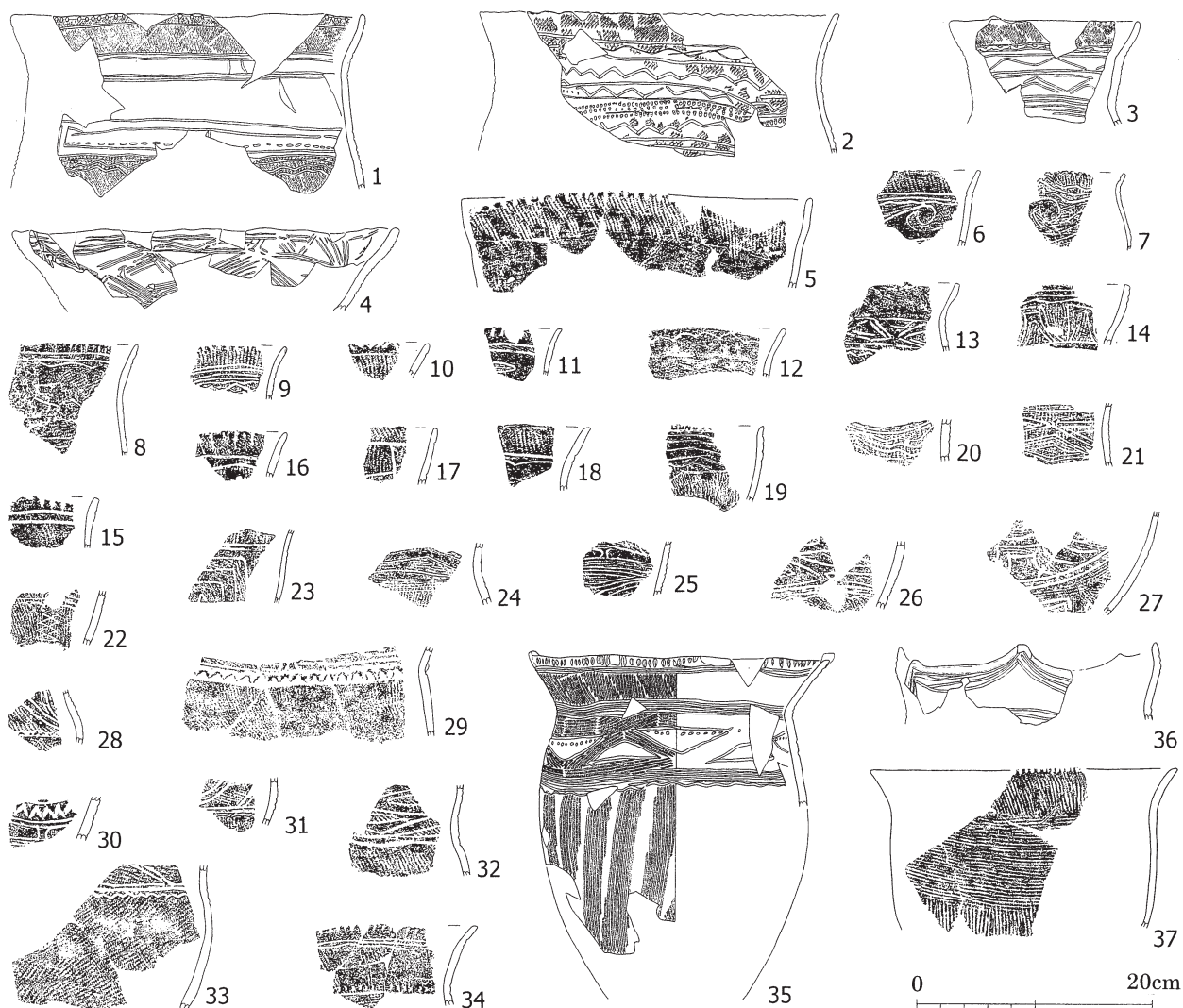
B類：「頸部であまりすばまらず、胴部が垂直に近い立ち上がりを見せ、口縁部がそのまま外反する」、「頸部（胴部）文様帯が消滅して口縁部・胴部（頸部）の2文様帯があるだけとなる」

と説く（大湯ほか 1994：246頁）。とりわけ文様帯と区画文とに着目し、弥生時代中期の「念仏間式にみられる多条沈線文（鋸歯状文を含む）による区画文から、家ノ前^{（マ）}A群において鋸歯状文の省略・区画文の簡素化が行われる。そして2本の平行沈線となり、さらには連弧文による区画（天王山式土器文化の波及？）がなされるようになると思われる。鋸歯状文が区画文に用いられず、区画文の



第16図 神康夫による家ノ前遺跡第Ⅳ群土器の分類

簡素化が進むと頸部文様帯と胴部文様帯は一体化し、A 類の口縁部・頸部・胴部の3文様帯構成からB 類の口縁部・(胴部) 頸部の2文様帯構成へとその幅を狭小化させる。この文様帯構成の変化は器形の屈曲と密接に関係を持つようになり、器形によって文様帯が規制されていくものと思われる」(大湯ほか 前掲：248 頁) といった変遷プロセスを推考した。



第17図 上尾駱(2)遺跡B・C地区の土器

しかし、この所説には見直しの余地があるように思うのである。なぜなら第一に、甕の形制にせよ、あるいは文様帯の構造にせよ、大石平遺跡では複数のパターンが絶えず併存していたからであり、第二に、例えばA類の第16図246とB類の248は同じBS-74グリッド(4×4m)のIV層で取りあげられており、両類の相違を直ちに時期差に読み換えることに若干の躊躇いを感じるからである。しかし、そうであれば、バラエティに富む家ノ前遺跡の土器のどれが古くて、新しいか、見定めるのはなおのこと難しく、多少なりとも「補助線」がほしい。

そこで、家ノ前遺跡から一旦離れ、大石平遺跡の諸例と関わりの深い例を他に捜してみると、大石平遺跡の南方1kmほどに位置する六ヶ所村上尾駱(2)遺跡B・C地区に行きあたる(市川ほか1988)。この資料も遺構にともなう例でなく、また、調査区の全域に散在しているため、大石平遺跡の各段階ほど資料の時間幅は限定的でなかろうが、1つの谷に面した東西200mの範囲のものであり、分析に致命的な影響はあるまい。大石平遺跡で最も新しいⅢ区20号竪穴住居跡例との関係から注目されるのが、第17図6・7である。両例とも頸部に磨消の入組文を描き、内面には直線文で区画した縄文帯をもつ。入組文は真っ直ぐ入り込んでいた先端部分が丸まり、渦文化する。15・16など、口縁部前面に縦長の刺突列を加える点もまた、同住居跡との繋がりをよく示している。2は、直線文と鋸歯文とを3段重ねて、刺突列を配する。20号竪穴住居跡にはみあたらないが、さらに1段階遡

れば、この種の文様を施した甕がある（第 10 図 4）。

一方、大石平遺跡にない要素も存する。その第一が多条の沈線で描き出す 4 の菱形文や 21 の重菱形文であり、第二は 3 や 28 ～ 30 のような交互刺突文である。Ⅳ区 10 号竪穴住居跡に始まり、Ⅲ区 20 号竪穴住居跡をゴールとする大石平遺跡の諸段階に、これらは全くともなわない。

交互刺突文の作出方法は多様である。3 や 28 のように刺突を 2 条の沈線間に加えた例だけでなく、沈線の間を隆帯状に盛りあげて、立体的に仕上げたり（29）、「ハ」の字状の切り込みで上下に段差をつけ、似た効果をあげたりする（30）。30 のようなケースは、小川原湖沼群周辺で他にみあたらず、刺突文の下方に施した X 字状の対向弧文もまた大石平遺跡にない⁸⁾。ちなみに、35 ～ 37 は恵山式の新しい部分にあたるとされ（佐藤 1990、岡田 1990、相澤ほか編 1990）、大坂拓は 34、35、37 を自身の恵山Ⅱ a ～ Ⅱ b 式に位置づける（大坂 2010）。

以上をふまえ、いまいちど家ノ前遺跡に対峙してみよう。弥生土器の出土地点をプロットしていくと、いくつかの集中する箇所があり、上で述べたように、BT—75 グリッドの周辺では A・B の両類がともに出土している（第 18 図）。磨消の入組渦文で飾った壺がこれに加わり（3・7）、上尾駸（2）遺跡の 2 例と較べると曲線化が進んで、▼で示した部分には凹みをもつようになる。これらを 1 つのまとまりと捉え、かつ、入組渦文の違いから上尾駸（2）遺跡の次に位置づけて、家ノ前Ⅰ段階と呼ぶ。

この種の入組渦文は尾駸沼南岸の六ヶ所村発茶沢（1）遺跡でもみられ（第 19 図 2、畠山ほか 1989）、わけても突起を付した口縁部がともなうのは興味深い。曲線化した入組渦文と突起とが組み合うことは、八戸市南郷区畑内遺跡 154 号竪穴住居跡の例から確かめられる（3、小山ほか 2003）。口縁部は内に鋸歯文を組み込んだ杵状文で飾り、突起を付す。口頸部境に「ハ」の字状の刺突で作出した交互刺突文を、頸胴部境には逆三角形の刺突列をそれぞれ施す。そうして、やや込み入った重菱形文で頸部を、曲線化の進んだ入組渦文で胴部を飾っており、これらが共時的な関係にあることを証示する。

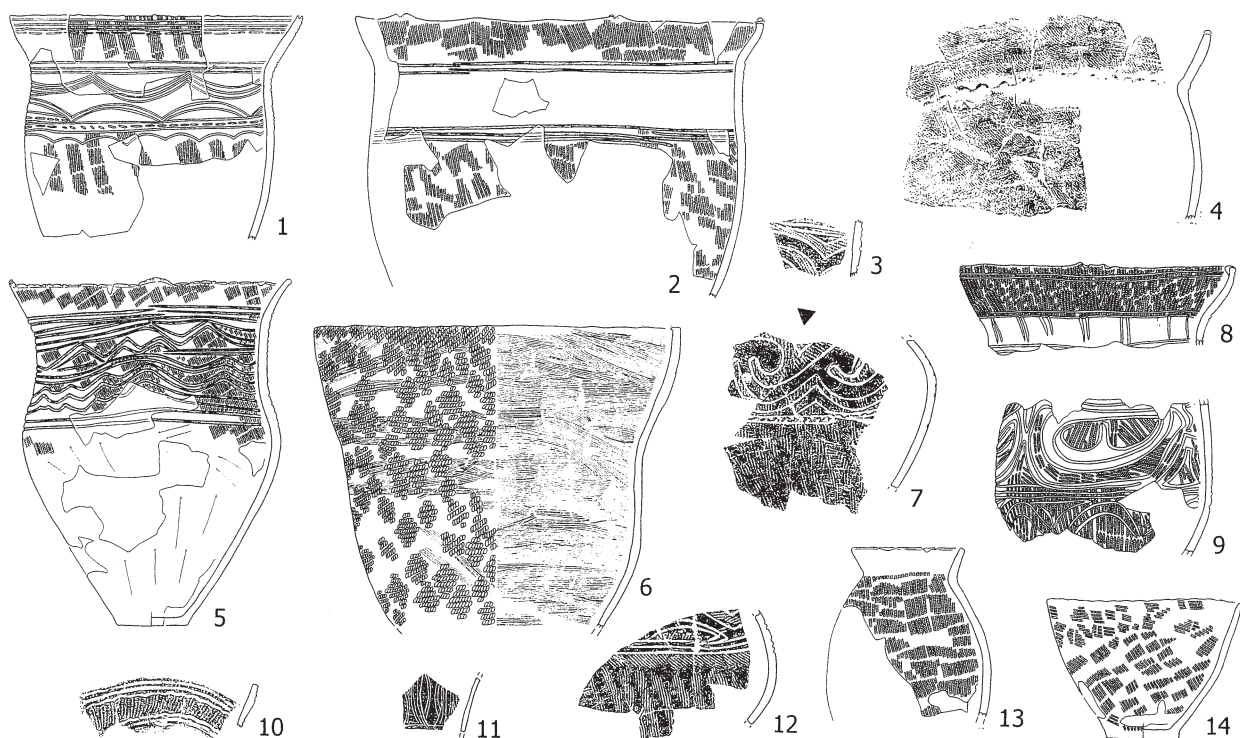
ちなみに、第 19 図 6 に示したのは、家ノ前遺跡の代表例としてとりあげられることが多い小型の壺で、口縁部に縦長の突起をもつ。曲線化の進んだ入組渦文と突起とが同じ時期に盛行したとすると、この壺と家ノ前Ⅰ段階とが期を同じくしている可能性は考えられてよい。

論を戻すと、第 18 図 3・7 に続く入組渦文土器が家ノ前遺跡ではみあたらない。周辺の例で補うと、直線部分が間延びして空隙が生じ、三角文でそこを填めた、八戸市田向冷水遺跡 SI49 竪穴住居跡の例が（第 19 図 4、小保内ほか 2006）、これらに後続するようである。そうして、三角文は渦文を崩してしまうらしく、家ノ前遺跡 BG—44 グリッドで出土した 5 の例がそれを如実に物語る。しかしながら、家ノ前Ⅰ段階よりも新しいこれらがどのような土器と組み合うか、いまは詳らかにし得ない。

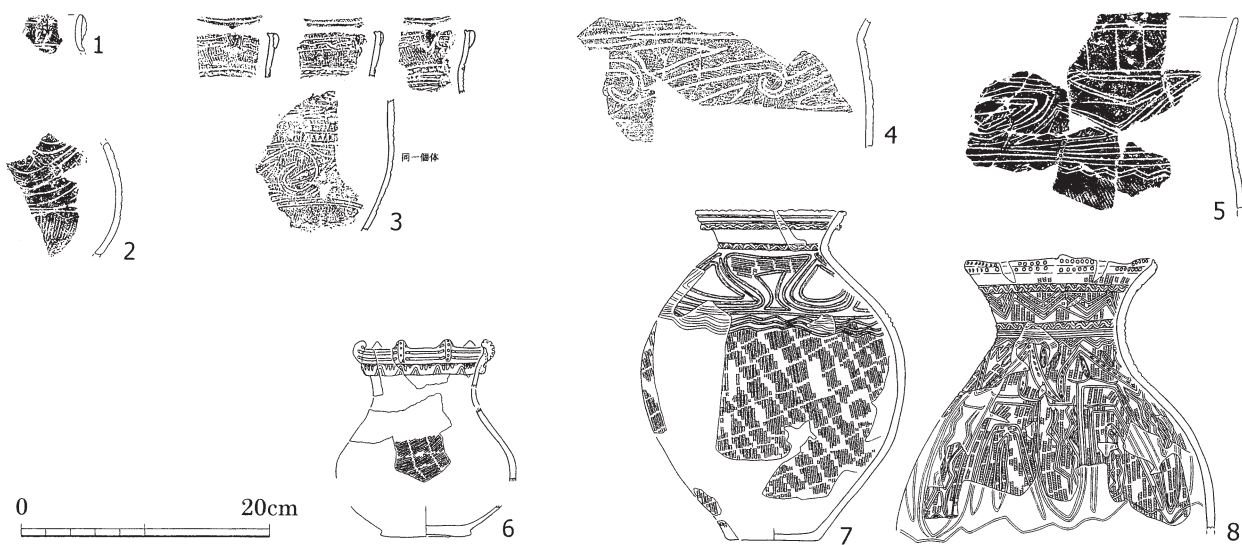
ただし、CL—57 グリッドにまともっていた 7・8 の壺は、頸部文様帯（無文帯）の上下が仕切られており、6 よりもⅠ・Ⅱ a・Ⅱ・Ⅲという天王山式らしい文様帯構造（鈴木 1976）へと歩を進めている。家ノ前Ⅰ段階の時期に 6 の壺が属するならば、7・8 は入組渦文が崩れゆく段階にともなうとみてよいだろう。

4. 大石平式の提唱

成果の確認 本稿では、青森県上北郡六ヶ所村大石平遺跡をとりあげて、東北北部における弥生時代中期の土器型式の行方を議論した。就中、旧稿の大石平 4 段階案を撤回し、型式学的な特徴を遺構毎に較べ直した結果、①Ⅳ区第 10 号竪穴住居跡→②Ⅳ区 7 号土壇→③Ⅷ区 306 号土壇→④Ⅲ区 16 号竪穴遺構→⑤Ⅲ区 13 号 b 竪穴遺構→⑥Ⅲ区 12 号竪穴住居跡→⑦Ⅲ区 13 号 a 竪穴住居跡→⑧Ⅲ



第 18 図 家ノ前遺跡 BT-75 グリッド周辺の土器群（家ノ前 I 段階）



第 19 図 入組渦文土器の諸例と家ノ前遺跡の壺（1・2：発茶沢（1）、3：畑内、4：田向冷水、5～8：家ノ前）



第 20 図 「念仏間式」の標式資料（一部）

段 階 名		基 準 資 料		型 式 名	
中 期	大石平Ⅰ段階 大石平Ⅱ段階	Ⅷ区2号住居跡	Ⅳ区10号住居跡	大石平1式	中 期
			Ⅳ区7号土壇	大石平2式	
			-	大石平3式	
			Ⅷ区306号土壇		
	-	Ⅲ区16号竪穴遺構		大石平4式	
	大石平Ⅲ段階	Ⅲ区13号b竪穴遺構		大石平5式	
	-	Ⅲ区12号竪穴住居跡		大石平6式	
	大石平Ⅳ段階	Ⅲ区13号a竪穴住居跡		大石平7式	
	-	Ⅲ区22号竪穴住居跡		大石平8式	
	-	Ⅲ区20号竪穴住居跡		大石平9式	
	-		上尾駁(2)	上尾駁(2)	後 期
	家ノ前B類段階	家ノ前B類	家ノ前BT-75G	家ノ前Ⅰ	
			(田向冷水)		
			(家ノ前)		

第3表 旧稿からの変更点

区22号竪穴住居跡→⑨Ⅲ区20号竪穴住居跡という9つの段階を摘出するに到った。以上は、一定の形態と装飾を持ち、かつ、他とは区別される特徴をそなえ、編年上の単位としてふさわしい。そこで、これらを大石平式と呼ぶ(第3表)。

最も古い①Ⅳ区第10号竪穴住居跡の段階は、津軽半島における宇鉄Ⅱ式の前後に位置があたえられ、馬淵・新井田川流域の田向冷水式までは遡らない。他方、最も新しい⑨Ⅲ区20号竪穴住居跡の後には、上尾駁(2)段階、家ノ前Ⅰ段階が順に続く。

大石平式と「念仏間式」 東北北部では、弥生時代中期後葉の土器型式として「念仏間式」が知られている。青森県下北郡東通村念仏間遺跡の採集資料を標式とする同式は、もともと弥生時代後期の初頭(橋 1968、工藤 1968)、もしくは「初期の土師器文化の影響を強く受けた弥生式土器群」(橋 1971: 43 頁)としてスタートしたが、やがて天王山式の前後に併行する東北北部の土器型式として評価が定まった(橋 1972、中村 1973 など)。ところが、須藤隆が天王山式以前に置いて以降は(第1表、須藤 1983)、一転して中期に位置づけるのが一般的になり、現在に到る。

須藤の主張を受けて、大石平遺跡の発掘調査報告では、Ⅲ区の出土品の「95%以上は、これまで県内では、出土例の僅かな土器群(念仏間・外崎沢式(須藤: 1983))に類似するものである」(北林ほか 1985: 473 頁)と報告された。本稿の大石平式でいうと、④Ⅲ区16号竪穴遺構の段階から⑨Ⅲ区20号竪穴住居跡までの諸例が、これにあたる。そうして、「念仏間式」標式資料の報告に携わった工藤竹久も、「大石平遺跡から器形のわかる甕・壺・小型の鉢など良好な資料が出土したため、念仏間式を大石平Ⅰ式と呼ぶ研究者も多い」(工藤 2005a: 20 頁)と述べ、大石平遺跡Ⅲ区の出土品＝「念仏間式」という理解を迫認する。

第20図に掲げたのが、「念仏間式」の標式資料である。工藤が説く、細く鋭い沈線による鋸歯文の多用(4・5)、磨消縄文の発達(9、12)、口縁部前面の縦長の刺突列といった同式の特徴は(1～3、工藤 2001)、たしかに大石平式にもみられる。しかしながら、重菱形文や(6、7)、「X」字状に加えた縦位の対向弧文(10、13)は、上尾駁(2)段階にあっても、大石平式の諸段階にはまだ出現していない。大石平式が念仏間遺跡の例と接点を持つ可能性は残されているにせよ、イコールで結ぶのは適切でないことに気付くのである⁹⁾。

大石平式の細別 大石平式は、9つの小細別を内包している。それらは文様帯や文様や器種構成に独自の特徴がそなわり、前後と区別することも充分可能である。そこで、各々を以下のとおり、

- ①Ⅳ区 10 号 竪穴住居跡 →大石平 1 式
- ②Ⅳ区 7 号 土壇 →大石平 2 式
- ③Ⅷ区 306 号 土壇 →大石平 3 式
- ④Ⅲ区 16 号 竪穴遺構 →大石平 4 式
- ⑤Ⅲ区 13 号 b 竪穴遺構 →大石平 5 式
- ⑥Ⅲ区 12 号 竪穴住居跡 →大石平 6 式
- ⑦Ⅲ区 13 号 a 竪穴住居跡 →大石平 7 式
- ⑧Ⅲ区 22 号 竪穴住居跡 →大石平 8 式
- ⑨Ⅲ区 20 号 竪穴住居跡 →大石平 9 式

と呼ぶ。

いまは、上尾駁（2）段階に先行する大石平 9 式を、中期の終末にあてておく。個性を精確にとらえ、違いの意味を考察する型式学は、境界領域であるがゆえに、今後、いっそう重要性を増していくこととなるだろう。

本稿を草するにあたり、宇部則保、笹森一郎、設楽政健、田中 允、船場昌子、青森県埋蔵文化財調査センター、青森市教育委員会、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館、六ヶ所村立郷土館の諸氏・諸機関に御高配をたまわりました（敬称略・五十音順）。

以上の方々、ならびに図版を作成していただいた齋藤友里恵氏、そうして旧稿を発表した学生時代以来、いまでも変わらず御指導いただいている川西宏幸先生と鈴木正博氏に、衷心より謝意を表する次第です。

註

- 1) 齋藤（2004）では「家の前」B 類段階と記してあるが、訂正する。
- 2) 「第Ⅵ群」土器の誤記とみられる。
- 3) 正確にいうと、筆者が恵山式土器の新古について論じた部分での指摘であるが、齋藤（2004）論文全体に関わる内容であることから、ここでとりあげた。
- 4) 「プロト天王山式」が中期末葉に編年される思考法は 21 世紀にも継続する」（鈴木 2014:46 頁）として、齋藤（2004）が例示される。
- 5) 本稿では、磨消・充填の両技法を総じて磨消縄文と呼ぶ。
- 6) 岩手方面では、常盤式（伊東 1960）や湯舟沢式（小田野 1986）までこの作法が継承される。
- 7) 二枚橋式を設定し、内容を規定したのは須藤隆であるが（須藤 1970）、大坂拓が指摘したように、「二枚橋式と後続する土器型式の関係については、須藤氏自身が瀬野遺跡出土土器群の一部を二枚橋式とするのか後続する土器型式とするか一定しないなど、曖昧な部分が生じている」（大坂 2007:56 頁）という問題があり、「一例をあげれば、須藤氏は瀬野遺跡の磨消縄文が施される土器を「宇鉄Ⅱ式」に位置づけながら（須藤 1998:fig.267-58）、別頁では二枚橋式に位置づけている（須藤 1998:fig.259-10）」（大坂 前掲:77 頁）という。この「磨消縄文が施される土器」というのが、波状文と工字状文とを併施した壺である。
- 8) 第 17 図 13 の三角文は、直前に位置づけられるであろう例が青森県むつ市脇野沢外崎沢（1）遺跡に（葛西ほか 1979）、さらに先行する例が同市田名部大曲海岸遺跡にある（鈴木 1978）。
- 9) 橘善光は、「念仏間式」提唱の翌年、「念仏間式土器の編年の位置はおそらく東北地方に波及した土師器文化の影響を強く受けた弥生式土器群でなかったかと思うのである」と結論づけたが福島県在住の目黒吉明氏は念仏間式土器を天王山式に対比し、天王山系の土器は北方に根元があると考えられると教示されており、同様の見解は馬目順一氏によっても天王山式との関係を覗えば後期に編年されようという見解をそれぞれ寄せている」（橘 1972:54 頁）と述べ、「念仏間式土器文化（天王山式系）」（橘 1975:19 頁）と認識をあらためた。「念仏間式」の本来の位置を明らかにするうえで、目黒や馬目の指摘は極めて重要な意味をもつだろう。

引用・参考文献

- 相澤清利ほか（編）1990「検討会記録」『「天王山式期をめぐって」の検討会記録集』弥生時代研究会 1～73 頁
- 新谷 武ほか 1987『大石平遺跡発掘調査報告書Ⅲ－むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書－』青森県教育委員会
- 市川金丸ほか 1988『上尾駁（2）遺跡Ⅱ（B・C地区）発掘調査報告書－むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財調査報告書－』青森県教育委員会
- 伊東信雄 1950「東北地方の弥生式文化」『文化』第2巻第4号 東北大学文学会 40～64 頁
- 伊東信雄 1960「東北北部の弥生式土器」『文化』第24巻第1号 東北大学文学部 17～45 頁
- 伊東信雄ほか 1982『瀬野遺跡－青森県下北郡脇野沢村瀬野遺跡の研究－』東北考古学会
- 岩本義雄ほか 1979『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館
- 大坂 拓 2007「恵山式土器の編年－北海道島南部における続縄文時代前半期土器編年の再検討－」『駿台史学』第130号 駿台史学会 53～83 頁
- 大坂 拓 2010「続縄文時代前半期土器群と本州島東北部弥生土器の並行関係」『北海道考古学』第46輯 北海道考古学会 89～104 頁
- 大湯卓二ほか 1994『家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ発掘調査報告書』青森県教育委員会
- 岡田康博 1990「青森県における天王山式期の現状と課題」『「天王山式期をめぐって」の検討会記録集』弥生時代研究会 頁番号なし
- 小田野哲憲 1986「湯沢3区の弥生式土器」『湯沢遺跡』第1分冊 滝沢村教育委員会 391～421 頁
- 小保内裕之ほか 2006『田向冷水遺跡Ⅱ－田向土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書2－』八戸市教育委員会
- 小山浩平ほか 2003『畑内遺跡Ⅱ－八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴う遺跡発掘調査報告－』青森県教育委員会
- 葛西 励ほか 1979『家の上・外崎沢（1）遺跡－（小沢地区農道拡張整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）－』脇野沢村教育委員会
- 川西宏幸 1982「形容詞を持たぬ土器」『考古学論考－小林行雄博士古稀記念論文集－』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 189～214 頁
- 北林八洲晴ほか 1985『大石平遺跡発掘調査報告書－むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書－』青森県埋蔵文化財調査センター
- 北林八洲晴ほか 1993『家ノ前遺跡・幸畑（7）遺跡Ⅱ発掘調査報告書－むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財調査報告書－』青森県教育委員会
- 木村鐵次郎ほか 2000『砂子遺跡－八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』青森県教育委員会
- 工藤竹久 1968「下北半島尻屋念物間遺跡」『考古学ジャーナル』No.23 ニュー・サイエンス社 21～23 頁
- 工藤竹久 2001「念仏間遺跡」『東通村史』歴史編Ⅰ 東通村史編集委員会・編纂委員会 644～652 頁
- 工藤竹久 2005a「青森県の弥生土器」『青森県史』資料編考古3－弥生～古代－ 青森県史編さん考古部会 14～21 頁
- 工藤竹久 2005b「大石平遺跡」『青森県史』資料編考古3－弥生～古代－ 青森県史編さん考古部会 152～157 頁
- 齋藤瑞穂 2004「東北北部における弥生時代中期土器編年の再検討」『古代文化』第56巻第8号 古代学協会 1～18 頁
- 佐藤信行 1990「天王山式土器の成立と展開－いわゆる交互刺突文の系譜を中心に－」『「天王山式期をめぐって」の検討会記録集』弥生時代研究会 頁番号なし
- 品川欣也 2005「岩手県二戸市足沢遺跡出土資料の再評価」『岩手考古学』第17号 岩手考古学会 25～36 頁
- 鈴木克彦 1978「青森県の弥生時代土器集成Ⅰ」『考古風土記』第3号（私家版） 71～92 頁
- 鈴木克彦 1980「青森県の弥生時代土器集成Ⅲ」『考古風土記』第5号（私家版） 189～210 頁
- 鈴木正博 1976「「十王台式」理解のために（2）－前号の追加1とリュウガイ第Ⅳ群a類土器について－」『常総台地』第8号 常総台地研究会 1～16 頁
- 鈴木正博 2014「「砂山」崩し－いつやるか、今でしょ！－」『利根川』第36号 利根川同人 45～55 頁
- 須藤 隆 1970「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』第56巻第2号 日本考古学会 10～65 頁
- 須藤 隆 1983「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」『考古学論叢』Ⅰ 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会 309～360 頁
- 須藤 隆 2007「東北北部の前期弥生社会と文化」『東日本縄文・弥生時代集落の発展と地域性』東北大学大学院文学研究科 67～84 頁
- 須藤 隆 2008「東北地方の弥生社会・文化の形成と土器型式」『芹沢長介先生追悼考古・民俗・歴史学論叢』芹沢長介先生追悼論文集刊行会・六一書房 331～377 頁
- 高瀬克範 1998「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』第34輯 北海道考古学会 21～41 頁

- 高瀬克範 2005「恵山式成立前後の型式細分と系統関係」『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年－平成14年度～平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書－』明治大学文学部考古学研究室 63～72 頁
- 橘 善光 1968「下北郡東通村尻屋念仏間遺跡－下北半島の弥生式土器－」『うとう』第70号 青森郷土会 41～48 頁
- 橘 善光 1971「青森県尻屋念仏間の弥生式土器について」『北海道考古学』第7号 北海道考古学会 39～43 頁
- 橘 善光 1972「下北半島の弥生中期後半以降の土器について」『北海道考古学』第8号 北海道考古学会 49～56 頁
- 橘 善光 1975「東北部の弥生式土器文化（上）－岡本論文への批判を含めて－」『考古学ジャーナル』No.106 ニュー・サイエンス社 15～19 頁
- 中村五郎 1973「北海道南部の続縄文土器編年」『北海道考古学』第9輯 北海道考古学会 81～99 頁
- 根岸 洋 2003「砂沢式再考」『研究紀要』第18号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1～20 頁
- 畠山 昇ほか 1989『発茶沢（1）遺跡発掘調査報告書』Ⅳ 青森県教育委員会
- 福田友之ほか 1989『三厩村宇鉄遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）－弥生甕棺墓の第4次調査－』青森県立郷土館
- 山田洋一ほか 1986『大石平遺跡Ⅱ 発掘調査報告書－むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書－』青森県教育委員会
- 山内清男 1932「日本遠古之文化 六－縄紋式以後（中）－」『ドルメン』第1巻第9号 岡書院 48～51 頁
- 山内清男 1933「日本遠古之文化 七－縄紋式以後（完）－」『ドルメン』第2巻第2号 岡書院 49～53 頁